



Title	ダトーガ語の子音体系再考
Author(s)	稗田, 乃
Citation	スワヒリ&アフリカ研究. 2001, 11, p. 102-117
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/71099">https://doi.org/10.18910/71099</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## ダトーガ語の子音体系再考

稗田 乃

### 1. 序

ダトーガ語の子音体系は、いままで未確定であった。とくに、閉鎖子音の系列に無声と有声の対立が存在するか否かが明らかにされなかった。稗田(1998)は、閉鎖子音の系列には無声と有声の音韻論的対立が存在しないことを主張した。ところが、ロットランドも指摘するように、閉鎖子音の無声と有声の対立を認めざるをえないような言語現象が存在する(Rottland, 1982:154)。稗田(1998)ではこれらの問題をあえて扱わなかった。この小論では、稗田(1998)では扱わなかった、閉鎖子音に無声と有声の対立が存在するかのように見える特殊な環境について論じる。そして、ダトーガ語の子音体系には無声と有声の音韻論的対立は存在しないことを証明する。

ロットランドは、閉鎖子音の無声と有声の対立がはたす音韻論的機能は低いと指摘しながらも、動詞の活用においてなど、どうしても閉鎖子音の無声と有声の対立を認めざるをえないと考えている(Rottland, 1982:154) 梅棹もロットランドと同じく、閉鎖子音の無声と有声の音韻的対立の存在に疑いをもちながらも、その対立の有無について問題解決が不能であるいじょうは、閉鎖子音に無声と有声を区別して記録するという立場をとっている。これら両者の立場は、閉鎖子音における無声と有声の対立の有無が明らかにならない段階では、正しい選択であると考えられる。エーレトは、ダトーガ語の子音体系に口蓋垂音/q/をのぞいて、有声閉鎖音を設定して、無声閉鎖音を認めない(Ehret, 1972)。実際、エーレトは、(Ehret, 1972)において、1例をのぞいて無声閉鎖子音を記録していない(1)。しかし、エーレトは、音素である有声閉鎖子音が音声的になぜ無声閉鎖子音で発音されるのか説明していない。

ロットランドは、閉鎖子音に無声と有声の対立を認めざるをえないとしながら、形態素の境界で生じる有声閉鎖子音の連続に来源をもとめることが可能な無声閉鎖子音を想定している。たとえば、ロットランドは、/rab:ka/「涙、複数」を名詞語幹 d b :g-と接尾辞-gaに分析し、形態素の境界で有声閉鎖子音の連続/gg/が無声閉鎖子音/k/になると考えている(Rottland, 1982:154)。しかし、ロットランドは、無声閉鎖子音/p, t, c, k/をすべての場

合に有声閉鎖子音の連続/bb, dd, jj, gg/に置き換えることには反対している。そうすることは、あまりに恣意的すぎるとロットランドは考えている。

本論では、ダトーガ語に閉鎖子音の無声と有声の音韻論的対立がないことをあらためて主張する。そうすることで、音韻論的にどのような利点があるのかを論じる。また、これまでの議論が陥っていた単純だが、しかし、決定的な誤りを指摘する。とくに第3章では、以前の私論で扱わなかった言語現象を中心に論じる。

### 1. 1. ダトーガ語

ダトーガ語は、東アフリカ、タンザニア北西部で話されている。エヤシ湖のまわりとババティの町周辺とムソマの町の郊外とイティギの町周辺で話されている。さらに、ダトーガ語を話す人々の一部は、タンザニアとザンビアの国境をこえて、ザンビアにまで移動しているといわれている。ダトーガ語の話し手の数は、総計、約6万4千人と書かれているが、定かではない (Welmers, 1971:884)。

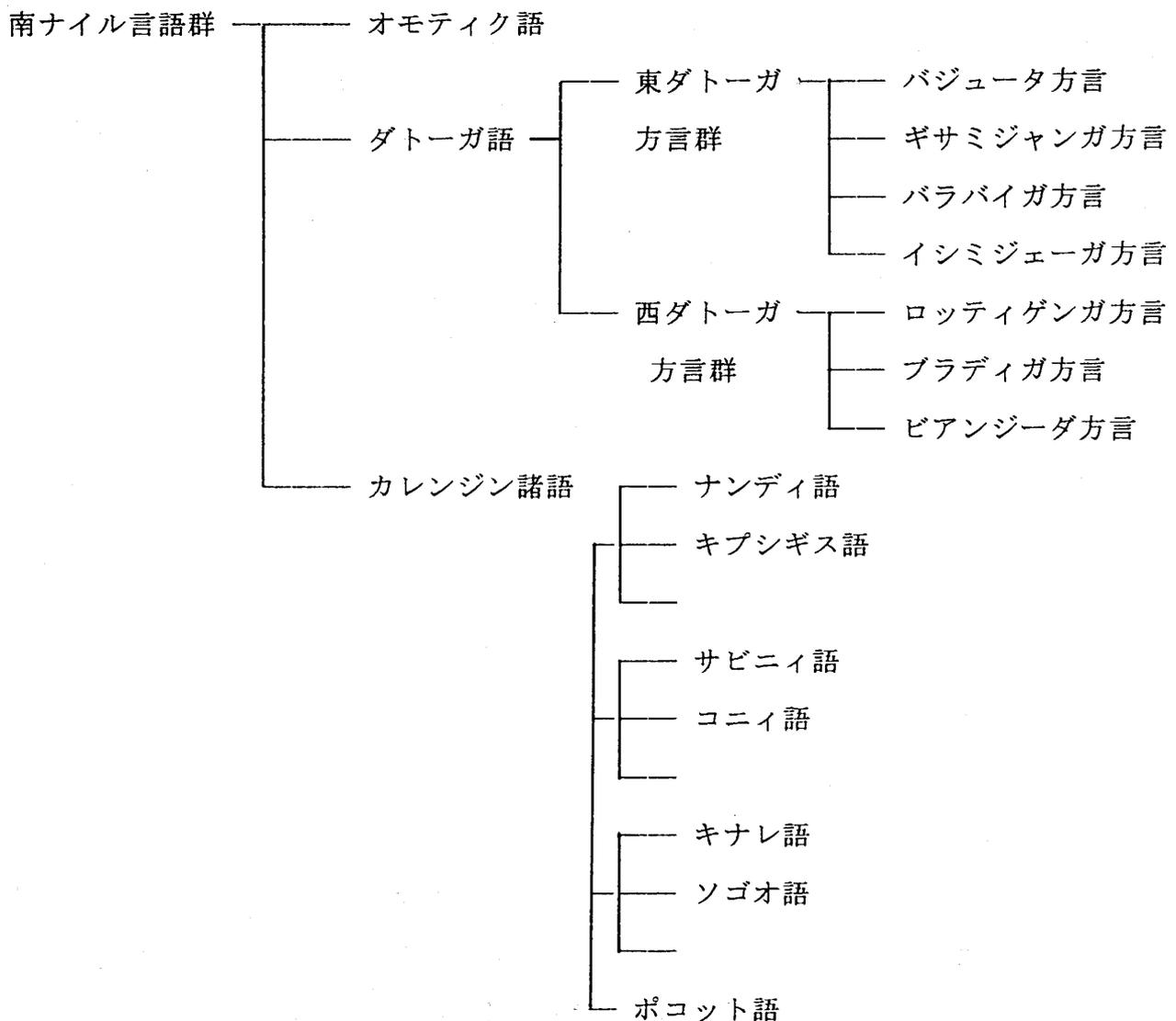
ダトーガ語は、ナイル・サハラ言語群のなかのナイル諸語に所属し、ナイル諸語のなかの下位分類では、南ナイル言語群に分類されている。ナイル諸語のなかでは、もともと南に位置する言語である。

ダトーガ語の内部には、地理的変種が存在する。ロットランドの分類では、地理的変種は、大きく2つのグループ、東ダトーガ方言群と西ダトーガ方言群に分類される。東ダトーガ方言群は、バジュータ方言とギサミジャンガ方言とバラバイガ方言とイシミジェーガ方言からなり、西ダトーガ方言群は、ロッチェゲンガ方言とブラディガ方言とピアンジーダ方言からなる。ロットランドが使用した地理的変種の名前は、富川が記録した地域集団の名前と一致する。富川は、これらのロットランドが記録した地理的変種の名前以外に地域集団 (Territorial Group) の名前として、ダロラジェーガ、ギダゴーディガ、ビシエーダ、ダラグワジェーガ、サラグワジェーガ、グムビエガ、マンガティガ、ダマルガ、サワスカを記録している (Tomikawa, 1970) (2)。ただし、富川が記録した地域集団が言語的にことなる地域変種を話す集団と一致するかどうかはまだ明らかではない。

ダトーガ語の地理的変種は、実際の地理的分布とかならずしも一致しない。たとえば、同一地域に異なる地理的変種が話されていることがある。これは、ダトーガ語を話す人々が多民族との戦いの歴史において、離合集散をくりかえし、また、頻繁に移動を行ってきたためである。異なる地理的変種を話す人々が、戦いのための大戦闘集団をつくり、転戦

をくりかえしたためである。

図1. ダトーガ語とダトーガ語の地理的変種の種類



## 2. ダトーガ語 (バジュータ方言) の子音体系

本論は、ダトーガ語の子音体系を明らかにすることを目的としている。ダトーガ語の子音体系といってもバジュータ方言の子音体系を明らかにする。第1章で述べたようにダトーガ語には多くの地理的変種があり、しかもその違いはかなり大きいと考えられる。これから著者が試みる議論は、あくまでバジュータ方言で可能であって、その他の地理的変種では不可能かもしれない。(3)

## 2. 1. 音声的な無声音と有声音の分布

ダトーガ語（バジュータ方言）に閉鎖子音の無声と有聲の対立が存在するかしないかについて音韻論的な議論をするまえに、音声的なレベルで無声音と有声音の分布を観察しよう。ダトーガ語は、閉鎖子音と摩擦音と側面音とふるえ音と半母音からなる比較的単純な子音体系をもっている。鼻音と側面音とふるえ音と半母音は、ダトーガ語においては、まったく無声と有聲の音韻論的対立などは問題にならない。これらの子音は、ダトーガ語では、普通、どの環境においても有聲性の特徴をもっている。

では、閉鎖子音と摩擦音の音声レベルでの無声音と有声音の分布は、以下のようにまとめることができる。

表 1. 閉鎖子音と摩擦音の音声的分布

(1) 摩擦音は、いつも無声で発音される。

例 [suuyenda] 「リカオン」、[gɛɛ{atka} 「歯、複数」

(2) 閉鎖子音は、無声音と有声音で発音される。ただし、その分布には以下のような偏りが観察される。

(a) 語頭の位置では普通、有声音で発音される。

例 [deeda] 「家畜」

(b) 鼻音と側面音とふるえ音のあとではいつも有声音で発音される。

例 [marɛrda] 「豹」

(c) 摩擦音や他の閉鎖音と連続するとき、無声音で発音される。

例 [bɛ{ta} 「象」、[gɛɛ{atka} 「歯、複数」

(d) 語末の位置ではいつも無声音で発音される。

例 [bɛ{ak} 「象、複数」

(e) 母音間では無声音で発音されたり、有声音で発音されたりする。

例 [iita] 「歯」

[ɲadiida] 「ライオン」

まず、摩擦音は、いつもどのような環境においても無声音で発音される。語頭の位置でも、語末の位置でも、母音間でも、また、閉鎖音と連続するときでも、無声音で発音される（表 1 の (1) の [s] や [ʃ]）。

一方、閉鎖子音は、無声音で発音されるときと、有声音で発音されるときがある。語頭の位置では、普通、有声音で発音され、また、鼻音や側面音やふるえ音のあとではいつも有声音で発音される（表1の(2)、(a)の語頭の[d]、(b)における[r]のあとの[d]）。ところが、摩擦音や他の閉鎖音と連続するときは、無声音で発音される（表1の(2)、(c)における[ʃ]のあとの[t]、また、[gɛɛʃatka]における[t]や[k]）。表1の(2)、(c)の環境について注意すべきことは、閉鎖子音が連続するとき、連続する閉鎖子音は、いつも無声音で発音されることである。いかえれば、有聲閉鎖子音と無聲閉鎖子音が連続して現れることはけっしてない。また、語末の位置でも閉鎖子音は、いつも無声音で発音される（表1の(2)、(d)の語末の位置における[k]）(4)。

これら上記の閉鎖子音の音声レベルでの発音は、表1の(1)から(2)の(d)までの分布をしめしている。表1の(2)、(e)は、閉鎖子音が母音間では無声音でも有声音でも発音されることをしめしている。母音間という環境での発音をのぞけば、表1の(1)から(2)の(d)までの閉鎖子音の音声レベルでの発音の分布は、無声と有聲にかんしていわゆる相補分布をしめしている。つまり、同一の環境で閉鎖子音が無声音で発音されたり、また、有声音で発音されたりすることはない。閉鎖子音は、ある特定の環境ではかならず無声音か有声音のどちらか一方で発音される。このことから母音間の環境をのぞけば、閉鎖子音は、無声と有聲の音韻論的対立がないことになる。閉鎖子音が無声音で発音される環境は、図2のように図式化できる。

図2. 閉鎖子音が無声音で発音される環境（ただし、表1の(2)、(e)をのぞく）

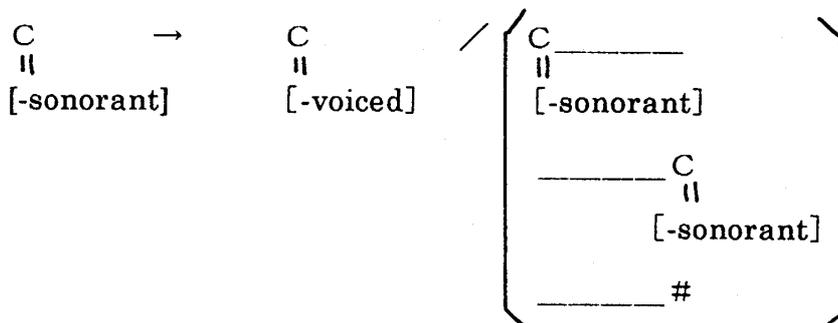


図2における [-sonorant] という特性をもつ子音は、ダトーガ語においては閉鎖子音か摩擦音かである。この環境指定は、[-sonorant]の特性をもつ子音、すなわち、閉鎖子音か摩擦音に閉鎖子音が連続すると、その閉鎖子音は無声音で発音されることをあらわしている。また、閉鎖子音は、語末の位置で無声音で発音されることをしめしている。そして、

図2以外の環境では、閉鎖子音は、有声音で発音される。

残された問題は、表1の(2)、(e)の環境において閉鎖子音が無声音でも有声音でも発音されることである([iita]における[t]と、[ɲadiida]における[d])。もしこの問題が解決できないなら、ダトーガ語の子音体系には閉鎖子音に無声と有声音の音韻論的対立が存在すると認めなくてはならない。なぜなら、同一の環境において、無声閉鎖子音と有閉鎖子音が存在することになるからである。

この問題を解決するために、以下のように考える。

音声レベルにおいて母音間の位置で無声音で発音される閉鎖子音を、同じ調音点で発音される閉鎖子音の連続であると仮定する。たとえば、表1の(2)、(e)の例、[iita]は、音韻論的には/iitta/であると仮定する。このように仮定すれば、閉鎖子音tは、連続し、図2における環境指定のなかの閉鎖子音と連続するという環境と一致する。そして、閉鎖子音/t/は、無声音で発音されることになる。

事実、この語は、名詞の単数語幹に単数・定名詞をつくる接尾辞-ta が接辞された形式である。単数・不定名詞の形式は、[iidi]と発音され、その音素表記は、/iiti/と考えられる。接尾辞-ta が接辞されていないため、閉鎖子音/t/が連続していない。

一方、[ɲadiida]は、音素/t/が閉鎖子音や摩擦音と連続していないと考えて、図2の環境指定以外の環境なので、有声音[d]で発音される。この語を音素表記すれば、/ɲatiita/となる。

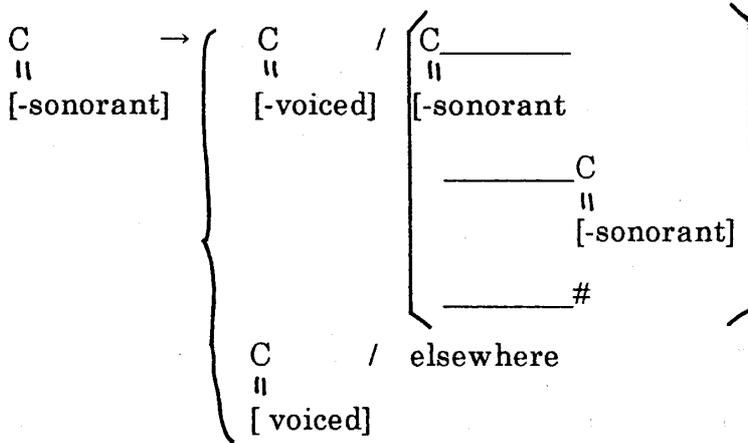
このように音声レベルにおいて無声音で発音される閉鎖子音を、とりあえず、閉鎖子音の連続と考えて、ダトーガ語の閉鎖子音には無声と有声音の音韻論的対立は存在しないと結論する。このとき、閉鎖子音は、無声閉鎖子音と考えておく。ただし、子音体系のなかで閉鎖子音に無声と有声音の音韻論的対立は存在しないということがわかったのだから、その閉鎖子音が無声音であるか、有声音であるかを議論することはまったく意味がない。しかしながら、有声音閉鎖子音だけをもち、無声閉鎖子音をもたない子音体系からなる言語を仮定することは、類型論的に考えてまったく不自然であると考えられる。それゆえ、ダトーガ語の子音体系のなかに無声閉鎖子音を仮定するのである。

そして、閉鎖子音は、音韻論的に条件づけられた異音として、無声音と有声音の異音をもつと考える。その閉鎖子音の音声レベルでの発音の現われ方を図にまとめると図3になる。

図3は、閉鎖子音がその調音点を同じにしようと調音点がことなろうとも、他の閉鎖子

音や摩擦音と連続するとき、また、語末の位置では、無声音で発音され、それら以外の環境では、有声音で発音されることをしめしている。

図3. 閉鎖子音の音声レベルでの現われ方



## 2. 2. 音声的証拠と形態論的証拠

音声レベルで母音間の位置において無声音で発音される閉鎖子音を同じ調音点の閉鎖子音の連続であると考え、指摘する。

第1に、実際の発音を注意深く観察すると、たとえば、/iitta/「齒」の閉鎖子音[t]は、2重子音[tt]に聞こえる。この事実は、梅棹(1990)にも Rottland(1982)においても指摘されている。

第2に、この語/iitta/は、形態素に分析すると、名詞語幹 iit-と定名詞単数形をつくる接尾辞-ta からなることがわかる。これは、この名詞の複数形をあわせて考えるとよくわかる。複数形は、語幹 iit-と複数語幹をつくる接尾辞-iと定名詞複数形をつくる接尾辞-ka からできている。この場合、名詞語幹の末尾に位置にある音素/t/と定名詞複数形をつくる接尾辞の初頭の位置にある音素/k/は、複数語幹をつくる接尾辞-iによって閉鎖子音の連続をつくることを阻止されている。その結果、実際に音声レベルでは[iidiga]と音素/t/も/k/も有声音で発音される。

また、人名に[gitiyanga]がある。これを形態素に分析すると、人名によく接辞される接頭辞[gida]/kita-/と「動物」を意味する[diyanga]/tiyanga/からできていることがわかる。この接頭辞が接辞するとき、接頭辞の末尾の位置にある母音が脱落して、その結果、接頭辞の末尾における子音/t/と語幹の初頭の位置における子音/t/が連続することになる。これを音素レベルで表記すると、/kit-tiyanga/と表記できる。このとき、音素/t/は、閉鎖子音

が連続するという図2の環境指定に合致する。その環境では、つまり、閉鎖子音が連続するとき、その閉鎖子音は無声音で発音される。すなわち、閉鎖子音の連続/tt/は、無声音[t]で発音されることになる。

### 2. 3. 閉鎖子音の連続を仮定することの利点

音声レベルで無声音として発音される閉鎖子音を同じ調音点の閉鎖子音の連続であると考えて、これら音声レベルでの無声音をすべて、閉鎖子音の連続で表記し、閉鎖子音には音韻論的な無声と有声の対立がないと仮定することと、実際に音声レベルで無声音で発音される閉鎖子音を無声閉鎖子音と考え、また、有声音で発音される閉鎖子音を有声閉鎖子音と考え、閉鎖子音に音韻論的な無声と有声の対立があると考えたこととは、まったく違いはないと思われるであろう。つまり、音声レベルで無声音で発音される閉鎖子音を閉鎖子音の2重子音、CCで表記し、有声音で発音される閉鎖子音を閉鎖子音の単子音、Cで表記することは、ただ表記の仕方を書き換えただけで、なんら問題を解決していないように思われるであろう。しかし、音声レベルで無声音で発音される閉鎖子音を、同じ調音点の閉鎖子音の連続と考えることがもたらす利点がある。

第1に、音声レベルで母音間の位置において無声閉鎖子音があらわれる頻度が低いことを説明することができる。なぜなら、同じ調音点の閉鎖子音が連続した場合のみに音声レベルで無声閉鎖子音が母音間の位置にあらわれるのだから、無声閉鎖子音が母音間の位置にあらわれる確率は、同じ調音点の閉鎖子音が連続する確率ということになる。これを単純に計算すると、ダトーガ語の子音と母音の数を合計した数、22分の1の確率ということになる。ただし、当然、この子音の数には有声閉鎖子音の数は合計に入れない。この確率では、無声閉鎖子音が母音間の位置で、音声レベルにおいてあらわれる頻度が低いのは当然といえる。

第2に、語頭に位置において無声閉鎖子音がふつう音声レベルであらわれないことが説明できる。図3で見たように語頭の位置では、閉鎖子音はふつう有声音で発音されるからである。また、逆に、閉鎖子音が連続するのはもっぱら形態素の境界であると考えられるので、語頭の位置ではふつう無声閉鎖子音が音声レベルであらわれないという事実と一致する。

第3に、歴史言語学の観点からみれば、南ナイル言語群のなかでダトーガ語の子音体系を再考することができる。

ダトーガ語の子音体系は、この小論の結論が正しければ、閉鎖子音に音韻論的な無声と有声の対立がないこととして、図4の(b)のように書くことができる。対照するために従来の考え方によるダトーガ語の子音体系を図4の(a)に、カレンジン諸語の子音体系を図4の(c)に並べておく。

図4 ダトーガ語の子音体系

(a) ダトーガ語 (従来)	(b) ダトーガ語	(c) カレンジン諸語
/ p t c k q	/ p t c k q	/ p t c k
b d j g		
(f) s } h	(f) s } h	s
l	l	l
r	r	r
m n ɲ ɳ	m n ɲ ɳ	m n ɲ ɳ
y w /	y w /	y w /

図4(a)の従来の考え方によるダトーガ語の子音体系の表では、有声閉鎖子音、/b/、/d/、/j/、/g/が含まれていたが、それらすべてを表(b)では排除することができる。このように有声閉鎖子音をダトーガ語子音体系から排除すると、表(b)と表(c)とを比較してわかるように、ダトーガ語の子音体系と南ナイル諸語の他の言語、たとえば、カレンジン諸語の子音体系は、きわめてよく似ていることがわかる。

ダトーガ語とカレンジン諸語の子音体系が違っているところは、閉鎖子音が音声レベルにおいて無声音と有声音で発音される環境の違いにある。この環境の違いを明らかにするために、カレンジン諸語において閉鎖子音が無声音と有声音で発音される環境を考察する。カレンジン諸語に属する言語における細部の違いを無視すれば、カレンジン諸語における閉鎖子音が音声レベルで無声音と有声音で発音される環境は、表2にまとめることができる。

表2 カレンジン諸語における閉鎖子音の音声的分布

(a) 語頭の位置で閉鎖子音は、いつも無声音で発音される。

例 ナンディ語 [kɔ:da] 「目」

(b) 鼻音と側面音とふるえ音のあとではいつも有声音で発音される。

例 ナンディ語 [ke:ldʌ] 「足」

(c) 摩擦音や閉鎖音と連続するとき、無声音で発音される。

例 キプシギス語 [kɪpsɪɡɪs] 「キプシギス」

(d) 語末の位置でいつも無声音で発音される。

例 ナンディ語 [ɪŋɔk] 「ニワトリ」

(e) 母音間では有声音で発音される。

例 ナンディ語 [krɪbʊt] 「落ちる」

カレンジン諸語に所属する言語のなかには、硬口蓋閉鎖子音/c/が母音間でも無声音で発音されたり、あるいは、自由変異として無声音でも有声音でも発音される言語が存在する。しかし、細部の違いを無視すると、閉鎖子音の音声的分布は表2でまとめたものでよい(5)。

閉鎖子音の音声的分布について、カレンジン諸語のそれとダトーガ語のそれとの違いは、語頭の位置での発音の違いだけであるといえる。カレンジン諸語では、語頭の位置で閉鎖子音は、無声音で発音されるが、一方、ダトーガ語では、有声音で発音される。

ダトーガ語とカレンジン諸語の子音体系の違いは、たんに閉鎖子音が音声レベルで無声音、あるいは、有声音で発音される環境が異なるだけである。その環境の違いをスケールであらわすと図5になる。

図5 閉鎖子音が無声音と有声音で発音される環境

言語	ダトーガ語	カレンジン諸語
環境	$\begin{array}{c} C \text{---} \\    \\ [-\text{sonor}] \end{array} \quad \text{---} \# \quad \# \text{---}$	$\begin{array}{c} C \text{---} \\    \\ [+ \text{sonor}] \end{array} \quad V \text{---} V$
無声/有聲	[-voiced]	[voiced]

図5のスケールは、以下のことを表している。ダトーガ語では摩擦音と閉鎖音に連続す

るときと、語末の位置で、すなわち、図5のスケールにおける縦一本線の左側の環境では、閉鎖子音は、無声音で発音される。語頭の位置や、鼻音と側面音とふるえ音のあとや、母音間の位置では、つまり、スケールにおける縦一本線の右側の環境では、閉鎖子音は、有声音で発音される。一方、カレンジン諸語では、摩擦音と閉鎖子音に連続するときと、語末の位置と、語頭の位置で、つまり、スケールにおける縦二本線の左側では、閉鎖子音は、無声音で発音され、鼻音や側面音やふるえ音のあとと、母音間の位置では、つまり、スケールにおいて縦二本線の右側の環境では、閉鎖子音は、有声音で発音される。

図5のスケールは、言語に普遍的な有声性の一般的スケールとほぼ一致している。スケールの右へいくほど有声性が高くなっている。有声性の高い要素と連続すると、閉鎖子音は、より有声音で発音される可能性が高くなる。ダトーガ語の閉鎖子音もカレンジン諸語の閉鎖子音もその音声レベルでの発音のされかたは、この一般的傾向に一致している。ただし、どの環境から有声音で発音されるかの境界が、ダトーガ語とカレンジン諸語では違っているのである。

### 3. 声門閉鎖子音

第2章で議論したようにダトーガ語においても閉鎖子音に無声と有声の音韻論的な対立が存在しないことが明らかになった。そして、母音間の位置で無声音で発音される閉鎖子音は、同じ調音点の閉鎖子音の連続であると主張した。ところが、このような音声レベルで無声音で発音される閉鎖子音すべてを同じ調音点の閉鎖子音の連続であるとするだけでは、説明がつかない現象がまだ存在する。

ダトーガ語の名称は、従来の文献においては、Datooga や Tatooga と書かれている。語頭の位置の子音は、無声閉鎖子音で表記されたり、有声閉鎖子音で表記されたりしている。これは、過去に記録を残した研究者が間違っただけで聞き取ったり、書き取ったと考えてはならない。また、第2章で議論したように、ダトーガ語の閉鎖子音に無声と有声の音韻論的対立が存在しないことによる自由変異であると考えられるかもしれない。ところが、第2章で明らかにしたことから、閉鎖子音は、語頭の位置では有声で発音されなければならない。したがって、閉鎖子音が、語頭の位置で自由変異として有声閉鎖子音でも無声閉鎖子音でも発音されると考えてはならない。

しかし、実際に現地調査をおこなうと、ダトーガ語の名称は、音声レベルで、[dattɔɔga] とも [tattɔɔga] とも、語頭の位置において無声閉鎖子音で、また同時に、有声閉鎖子音で発音

されるのを観察することができる。語頭の位置で音声レベルにおいて、無声音でも、また、有声音でも発音されるのが自由変異ではないとすれば、いったいどのように考えれば良いのだろうか。

じつは、音声レベルで詳しく観察すれば、語頭の位置で無声音で発音されるとき、その無声閉鎖子音の前には声門閉鎖音[ʔ]が観察できるのである。それに対して、語頭の位置において有声音で発音される閉鎖子音の前には声門閉鎖音[ʔ]が観察できない。さらに、2つの形式、つまり、語頭の位置において無声閉鎖子音で発音される形式と、語頭の位置において有聲閉鎖子音で発音される形式を、その用いられる文脈をよく観察すれば、語頭の位置において無声閉鎖子音で発音される形式と、語頭に位置において有聲閉鎖子音で発音される形式では、用いられる文脈が異なっていることがわかるのである。語頭の位置において有聲閉鎖子音で発音される形式は、なんら強調もないふつうの文脈で用いられるのに対して、語頭の位置において無声閉鎖子音で発音される形式は、強調のある、あるいは、詠嘆がある文脈において用いられるのである。この事実を整理すると以下の表3になる。

表3 声門閉鎖音が使用される文脈

- (a) [dattɔ̃ga] 「ダトーガ」
- (b) [ʔtattɔ̃ga] 「おお！ダトーガよ！」

声門閉鎖音ももちろん閉鎖子音であるから、表3 (b) では語頭の位置で声門閉鎖音が存在し、そして、それに閉鎖子音が連続することから、これらの閉鎖子音は、無声音で発音されなくてはならない。なぜなら、第2章で議論したように、ダトーガ語の閉鎖子音は、閉鎖子音や摩擦音と連続するとき、無声音で発音されるからである。もちろん、声門閉鎖音は、閉鎖子音の1つである。

従来、ダトーガ語の名称が **Tatooga** として語頭の位置の子音を無声音で記録していたのは、記録者が語頭の位置に声門閉鎖音が存在することに、気づかなかったことと、また、語、あるいは、文が、強調、または、詠嘆をこめて発話されたことに、気づかなかったことによる。

したがって、表3 (b) における語頭の位置にある声門閉鎖音は、意味をもつ1つの形態素として認定しなければならない。それは、強調、あるいは、詠嘆文をつくる形態素と考えられる。この形態素は、どんな名詞の前にも置かれることは可能である。そして、こ

の形態素が閉鎖子音の前に置かれたとき、閉鎖子音の連続を形成することになり、当然、これらの閉鎖子音の連続は、無声音で発音される。強調、あるいは、詠嘆文をつくる形態素として声門閉鎖音からなる形態素が存在すると考えると、表3 (a) と (b) は、声門閉鎖音の存在に関して、ミニマルペアをつくっている。したがって、声門閉鎖音は、ダトーガ語の子音体系において1つの音素であると認めることができる。表3 (a) と (b) を音素レベルの表記をすると表4になる。

表4 表3の音素レベル表記

- (a) /tattɔ̹ka/ 「ダトーガ」  
 (b) /ʔtattɔ̹ka/ 「おお！ダトーガよ！」

無声閉鎖子音が語頭の位置にあらわれることにより、第2章の議論を、一見、否定するように思われた例は、さらに、第2章でおこなった議論を補強することになっている。

また、きわめて稀ではあるが動詞活用のなかで無声閉鎖子音があらわれることがある。たとえば、複数命令形に無声閉鎖音があらわれる。

表5 動詞命令形 (バラバイガ方言)

Sg.		Pl.		
ábuusa	'Fege!'	ɔ̹puusa	'Fegt!'	
ádaapa	'Schmiede!'	ɔ̹taapa	'Schmiedet!'	
águleena	'Teile'	ɔ̹kleena	'Teilt!'	(Rottland, 1982:154)

表5では、単数命令形は、動詞語幹の初頭に有声閉鎖子音が存在するのに対して、複数命令形は、動詞語幹の初頭に無声閉鎖子音が存在する。

表5における複数命令形を説明するには、動詞語幹に複数命令形をつくる接頭辞が接辞されていると考えて、しかも、その接頭辞の末尾の位置に声門閉鎖音が存在すると考えればよい。たとえば、複数命令形をつくる接頭辞は、/ɔ̹ʔ/と考える。

表6 動詞複数命令形をつくる接頭辞

/ɔ̹ʔ/ + /puusa/ → /ɔ̹ʔpuusa/ 「掃除しろ！（複数）」

ただし、複数命令形において、動詞語幹の初頭の位置に無声閉鎖子音があらわれるのはクラス2の動詞においてのみである。この事実は、ナイル諸語東方言や南方言に所属する言語が動詞語幹に2つの類が存在し、しかも、それぞれの類に属する動詞語幹がその初頭の位置に母音をもつか、もたないかでどちらの類に所属するかが決定されることと関係している。ダトーガ語では、語幹初頭の位置の母音は失われて、類の区別は動詞活用における違いのなかに保存されている。普通、ダトーガ語を除くナイル語東方言、南方言に所属する言語の文法を記述するとき、語幹初頭の位置に母音がある動詞語幹を、クラス2と分類する。しかし、ロットランドが記述したダトーガ文法では、表5と表6からわかるようにクラス2に分類される動詞語幹には、その初頭の位置に母音が存在しない。これとは逆に、クラス1と分類される動詞語幹に、その初頭の位置に本来は母音が存在したと考えることができる。なぜなら、本来、語幹初頭の位置に存在した母音が、複数命令形をつくる接頭辞の末尾の位置にある声門閉鎖音と動詞語幹の閉鎖子音とのあいだに介在するために閉鎖子音が連続することを阻止する。その結果、閉鎖子音は、クラス1の動詞語幹では、複数命令形においても、無声音で発音されることはないのである。声門閉鎖音を仮定することによって、ダトーガ語の動詞語幹に存在する2つの類の分類は、本来、語幹の初頭の位置に母音をもっていた語幹と、母音をもっていなかった語幹の区別であることがわかる。この仮説をおしすすめることによって、ダトーガ語の動詞形態論にあらたな発展をもたらすことが可能になるであろう。

#### 4. まとめ

まず、ダトーガ語の子音体系には閉鎖子音に有声と無声の音韻論的対立がないことを第2章で提案した。同時に、摩擦音は、常に無声音で発音されることから、ダトーガ語の子音体系においては有声と無声の音韻論的対立は存在しないといえる。第3章では、ダトーガ語の子音体系内に声門閉鎖音を1つの音素として認めなくてはならないことを証明した。そして、従来、無声閉鎖子音として記述された子音は、同じ調音点の閉鎖子音の連続か、あるいは、声門閉鎖音と閉鎖子音の連続のどちらかであると考えられる。同じ調音点の閉鎖子音の連続であるか、あるいは、声門閉鎖音と閉鎖子音の連続であるかは、形態素分析をおこなうことで決定される。第3章で例示した感嘆、詠嘆文をつくる形態素や動詞複数命令形をつくる形態素には、声門閉鎖音が含まれている。これらの形態素が接辞されるとき、

声門閉鎖音と閉鎖子音が連続するため、音声レベルでのみかけじょう無声閉鎖音があらわれる。ダトーガ語の子音体系は、図6にまとめられる。

図6 ダトーガ語の子音体系

/	p	t	c	k	q	?
(f)	s	ʃ	h			
	l					
	r					
m	n	ɲ	ŋ			
		y	w			/

注

本研究は、文部省科学研究補助金（課題番号08041015）により可能となった。調査は、1996年11月と12月に行われた。調査地は、タンザニア、アルーシャ県、マンゴラ村である。

- (1) Ehret, 1972, p.120になぜか無声閉鎖子音をもつ単語が1例、記録されている。  
kunio:d 'mortar'がそれである。エーレットは、ダトーガ語の音素分析は行っていないと認めている（私信）。
- (2) ダトーガの社会組織は、地域集団の連合体からなっている。氏族は、地域集団を横断するように、同じ名前の氏族が異なる地域集団のなかにも存在する。たとえば、aという名前の氏族をXという地域集団のなかにもYという地域集団のなかにも見つけることができる。
- (3) ギサミジャンガ方言についての小さな記述が、Rottland & Creider, 1996に見つけることができる。これと著者が調査したバジュータ方言の記述のあいだにも違いを見つけることができる。
- (4) ダトーガ語では、語末の位置にある母音は、自由に脱落することができる。母音脱落の結果、語末の位置にある閉鎖子音は、無声音で発音される。
- (5) カレンジン諸語における閉鎖子音のおもな異音は、以下のとおりである。
  - (a) 鼻音と側面音のあとでは、すべての閉鎖子音は有声音で発音される。
  - (b) 母音間とふるえ音のあとでは、両唇閉鎖子音/p/と軟口蓋閉鎖子音/k/は有聲

音で発音される。

(a) と (b) で述べられた異音は、カレンジン諸語に属するすべての言語で同じように観察できる。

(c) 歯茎閉鎖子音 /t/ と硬口蓋閉鎖子音 /c/ は、カレンジン諸語に属する言語のあいだで音声レベルのあらわれ方に違いがある。

ナンディ語とキプシギス語 : /t/ と /c/ は、母音間とふるえ音のあとで無声音で発音される。

ケヨ語 : /t/ は、母音間とふるえ音のあとで無声音で発音される。 /c/ は、母音間で無声音で発音される。

北トゥゲン語 : /t/ は、側面音のあとで無声音でも有声音でも発音される。

マルクウェタ語 : /t/ は、母音間とふるえ音のあとで無声音で発音され、 /c/ は、ふるえ音のあとで無声音で発音される。

サビニ語 : /c/ は、語頭の位置でも有声音で発音される。

コニ語 : /c/ は、ふるえ音のあとで無声音で発音される。

#### 参考文献

- Ehret, Christopher. 1971. *Southern Nilotic History*. Evanston, Northwestern University Press.
- Hieda, Osamu. 1998. 'Datooga Consonant System,' (in Japanese) *Journal of Swahili and African Studies* 8:81-95.
- Rottland, Franz. 1982. *Die Südnilotischen Sprachen*. Berlin, Dietrich Reimer.
- Rottland, F. & Ch. Creider. 1996. 'Datooga Nominals: the Morphologization of Vowel Harmony,' *Afrikanistische Arbeitspapiere*, 45:257-268.
- Tomikawa, Morimichi. 1970. 'The Distribution and the Migration of the Datoga Tribe: The Sociological Distribution of the Datoga Society in the Mangola Area,' *Kyoto University African Studies* 5:1-46.
- Umesao, Tadao. 1990. 'Notes on the Datoga Language,' (in Japanese) *Umesao Tadao Chosakusyuu*, vol.8. pp.239-261. 「梅棹忠夫著作集 8 卷アフリカ研究」
- Welmers, Wm. E. 1971. 'Checklist of African Language and Dialect Names,' *Current Trends in Linguistics*, vol.7. pp.759-900.